

京都精華大学 オープンキャンパス 6月10日(日)

KYOTO
SEIKA
UNIV.
2018
OPEN
CAMPUS
GUIDE

Doors

「ドアーズ」

volume

09

読まない空気があってもいい。ぼくらの「好き」は、隣りの人とは違う。

セイカの 好き 採集図鑑

ハンドメイドのピアス

松田ルリカさん
(ポピュラーカルチャー学部ファッションコース3年生)

今ハマっているのはハンドメイドのアクセサリー集め。なかでもピアスを多く集めてきました。きっかけは大阪で買い物を楽しんでいるときに、たまたま立ち寄ったハンドメイドショップで出会ったピアスに一目惚れしたこと。そこから一気にのめりこんでいきました。休みの日には、掘り出し物を探しに、あえてこぢんまりとしたところを選んで入ってみたり。京都でもとくに、精華のある左京区にはユニークな雑貨屋やショップが多くて、ステキな出会いがあるんです！あと、京都のお寺や神社では「手作り市」という手作り作家が集まるアートマーケットがあって、キュンと



コレクションのなかでも特にお気に入りの一品。「絶対に成功させたいなにかがあるときは、必ずこれを身につけていますね。」

きたものがあれば買っていますね。ハンドメイドのアイテムは、次にお店に来たとき、欲しいものがまたあるとは限らない、まさに一期一会。おかげでいつも金欠です(笑)。でも、自分自身も服作りをしているので、一つひとつ手作りされたモノの価値を大切にしたいんですよね。それにアクセサリーやピア

スは、私にとって、自分自身を表現するためのキーパーツなんです。気合を入れたい日はこれ、初対面の人と会うときはこれという感じで、気分や状況によって身につけるものを決めています。だから友だちは、私がつけているピアスで、その日の感情が読めちゃうらしいです(笑)。



小さな香水の瓶がついたピアス。その日の気分で香りを変えるのだそう。

セイカの「好き」採集図鑑

「好き」を「好きだ」と、素直に言える場所。それが精華。しかも、一途にとことんまで突き詰めていく。そんなセイカ生たちの「好き」を集めました。

映画絶望感が味わえる

「ぼくの好きな作品ばかりなんですが、万人にオススメできないところ(笑)」。



絶望感が味わえる映画が好きです。最近だと『デトロイト』がダントツ。1967年にアメリカのデトロイトで起きた暴動を題材にしたサスペンスで、40分にもわたる尋問シーンは本当に現場にいるような緊迫感が息が苦しくなるほど。あと『ザ・ウォール』という作品。姿が見えないスナイパーに狙われた主人公が、自身を守るもの、隠すものがボロボロの壁一枚という状況で必死に対峙するという内容なんですが、その絶望感も新鮮でした。昔からハッピーエンドが苦手だったんです。ある程度のリアリティがないと、「そんな現実でありえるのかな」と考えてしまって受け入れられないんですよね。けど、それは裏を返せば反骨精神でもあり、のしあがっていくのが好きっていうことでもあるんです。ぼくは高校までアメリカに住んでいて、そのときの友だちが漫画家を目指してたんですよ。彼に「ストーリーを描いてほしい」と頼まれて、原作を書いたんです。日本に帰国したとき、友だちとその作品をダメもとで集英社に持ち込みに行ったんです。そしたら「これがジャンプに載ると思いますか？」って突き放されて。けど、その時の編集者に一年後、たまたま再会するんです。不機嫌な顔をされつつも作品を見てもらえて、すごく褒めてもらえたんですよね。作家になろうという決心がついて精華にきました。あのとき味わったのも、ある種の絶望感。このあと、どう這い上がるか。それがリアルですよ(笑)。

上田凱亜さん
(マンガ学部 新世代マンガコース2年生)



「考えてみれば、このネームが、ぼくの進む道を決めてくれたのかも。」

音楽やファッション、漫画やイラストなど、いろいろと好きなものは多いんですが、あえて言うなら精華の「授業」が好きです。なかでも「あいうえおデザイン あいうえお」という授業。日本を代表するメガネメーカーと連携して、実際に使えるメガネを自分の手で作っていくんです。しかも、作品によっては商品化され、全国の店舗で販売されます。授業では制作の基礎知識を学び、メガネ工場を訪れ、アイデアを出し、スケッチや製図、フレームの素材選びからプロトタイプ制作まで、メガネ作りのなにもかもを体験できました。大好きなファッションとも繋がりのある分野だから、卒業制作も作品のひとつとしてアイウェアを作ろうと考えています。

もうひとつが1年生のときに受けた伝統工芸の授業。数ある伝統工芸のなかから、僕は金属を加工する「鍛金」をセレクトしました。スマートフォンを置くだけで、音が反響して音楽が楽しめるスピーカーを作ったんです。これには講師の職人さんも驚いたみたいで、「こんな作ったやつは、誰もおらんかった」と褒めていただけて本当にうれしかったです！4年間でおもしろかったことを考えたら、やっぱりこの2つの授業でしたね。入学してからほんとにずっと楽しくて、一度も後悔がないです(笑)。



メガネの産地、鯖江市の工場を訪れ、職人からメガネ作りの工程を覚えてもらう。



素材選びも学生自身が行う。制作の過程でフレームが折れてしまい、一からやり直しとなることも。

授業

山目篤史さん
(デザイン学部プロダクトコミュニケーションコース4年生)

2.5次元舞台

長谷川さくらさん
(文学部 文学専攻4年生)

もともと舞台にはあまり興味はなかったんですが、精華の先輩に誘われて観に行った『ハイキュー!!』の舞台がきっかけで「2.5次元舞台」にハマりしています。『ハイキュー!!』はプロジェクションマッピングを使った舞台で、その映像と演劇の融合は、ただただすごかったです！それからはDVDを集めたり、他の作品の2.5次元舞台を見に行ったり……。好きが高じて、現地での調査を中心とした授業課題も、「舞台」を研究テーマにしました。2.5次元舞台だけではなく、小さな劇団の舞台や宝塚歌劇団の公演にも足を運び、演劇とは何か、舞台とは何かについて研究したんです。

直なところ悩みました。というのも、自分の好きなものを研究テーマにしているのが、もっと学問的なテーマを選ばなければいけないんじゃないか、という疑問や葛藤があったんです。でも、まわりの友だちや先輩が本当に自由に卒業論文のテーマを決めているのを見て、「好きなことをテーマにしてもいいんだ」と思えたんです。自分のなかにあった硬い殻が破れた瞬間でしたね。この大学は、好きなことを好きって気兼ねなく言えたり、とことん向き合える文化があるのだと思います。



家で眠っていた本格仕様の双眼鏡。「舞台の鑑賞には欠かせないアイテムなんです」。



ハイパープロジェクション演劇「ハイキュー!!」鳥野、復活！”パンフレット ©古館春一・集英社・ハイパープロジェクション演劇「ハイキュー!!」制作委員会 公演「あゆみ」パンフレット ©劇団しようよ 宝塚大劇場 雷組公演「ひかりふる路」～革命家、マキシミリアン・ロベスピエール～”パンフレット ©宝塚歌劇団 ミュージカル「刀剣乱舞」パンフレット ©ミュージカル「刀剣乱舞」製作委員会

鑑賞してきた舞台のパンフレットも、重要な研究資料のひとつ。

落書き

私の好きは「落書き」ですね。黒板やプリントの裏でも描けるスペースを見つけると、所構わず手が動いちゃうんですよ。友だちにもよく「ほんまに落書き多いよね〜」って言われるんですけど、「うん、そうやねん〜」って返事しながら、手元で落書きしてたり(笑)。描くときは本当ににも考えていなくて、自然と目に入ったものを描いています。あと魚が好きなので、リュウグウノツカイやアロワナとかをよく描いてますね。スペースを見つけると、どうしてもウズズスちゃうんです。それは陶芸の作品にもよく表れていて、器の絵付けも白いところをぜんぶ埋めちゃいたくなるんです。友だちや先生に「白いところをあえて残すからいいんやで」とアドバイスを受けて、描くの我慢することも(笑)。今はもう、落書きが自分のスタイルだと思っているので、卒業制作では思う存分に絵付けをした器を構想中です。興味があるのは、インドの女性がボディアートとして施すヘナタトゥーの柄。シンプルな形の器ではなく、女の人をイメージにしたオブジェを制作して、ヘナのような絵付けをしてみたいですね。

小林あおばさん
(芸術学部 陶芸コース3年生)



絵付けは、インドのボディアートであるヘナタトゥーをモチーフにすることが多い。



「改めて見ると、好き放題に描いていますね。カオス(笑)」。

